

# 今こそフットボールが『フェアプレイ』を象徴する競技であると示したい

公益社団法人日本アメリカンフットボール協会会長

## 国吉 誠



—— 会長就任時に力を入れていく案件として、運営基盤の強化と、安全対策の2つの柱を掲げられていました。1年を振り返ってこの二点の進捗をお聞かせ下さい。

**国吉** まず、5月6日の関西学院大学対日本大学の定期戦で発生した『悪質タックル問題』が社会問題へと発展してしまったことで、競技の倫理や安全性が一般社会からも問題視されてしまう事態になったことに触れなければならないでしょう。関東学生連盟の規律委員会、日本大学が設置した第三者委員会の調査でも明らかになっていますが、『悪質タックル』は極めて特異な過程を経て起こった事象であり、本来であれば起こりえないものです。

一方で、起こりえないことが起こってしまったという事実から

目を背けてはなりません。

「伝統的に、フットボールは教育活動の重要な一環を担っている。フットボールは激しく、力に満ちた、身体をぶつけ合うスポーツである。それゆえ、プレーヤー、コーチ、その他の試合関係者に対しては、最高のスポーツマンシップと行動が要求される。不正な戦術、スポーツマンらしくない行為、故意に相手を傷つけることは絶対に許されない」

ルールブック冒頭に記載されているフットボール綱領は我々が競技を行う上で、大前提となるコンセンサスです。今一度、原点に立ち返って競技のフィロソフィーを理解することはもちろん、今回の問題を教訓に、こうした事態が二度と発生しないようにするための具体的な施策に取り組んでいます。

5月27日に発表した『フェアプレイ宣言』にも盛り込みましたが、フェアプレイ推進委員会(委員長=会長)を設立し、その下に設置した再発防止ワーキング・グループと、フェアプレイ・ワーキング・グループを設置しました。各グループではスポーツ指導者、教育者、第三者的に俯瞰して見ることのできるメディアの方々など、様々な専門家の方々からご意見をいただくと同時に、常に客観的な視点で我々の姿を見ていただきながら、競技として自らを律する仕組み作りに積極的に取り組んでいく方針です。

—— 運営基盤の強化という点についてはいかがですか？

**国吉** 今年1月から日本協会事務局に常駐の事務局員として武居和彦・元江戸川学園取手高校監督を採用しました。通常業務の他、JAF Aフットボールアカデミーや、日本代表活動の運営窓口など、無給の理事が担当するには負荷が大きい業務を担当しています。

組織としてのコンプライアンスやガバナンスの整備は『悪質タックル問題』以前から優先順位の高い課題として取り組んできました。内部通報窓口を設けたのもその一つです。窓口は日本協会と外部弁護士事務所の二箇所を設けています。JAF A傘下のチームや連盟の中で何か問題が起こった際、被害を受けている側がその事実を安全に通報できる窓口を設けたことは、我々がフィールド内だけでなくフィールド外でも『フェアプレイの精神』を遵守する競技であることの表明でもあります。

正常なガバナンスを実現するためには、客観的な視点が必要です。

6月17日の社員総会で、協会理事として元・バレーボール女子米国代表のヨコ・ゼッターランド氏に加わっていただくことが決定しました。JAF A初の女性理事、しかも、アスリートとして一流の経験を持ち、指導者としても実績を残され、スポーツの普及活動にも取り組まれているゼッターランド氏は、スポーツ・パーソンとして一流の経験をされている方です。その視点から、競技の姿や方向性を客観的に見ていただきたいと考えています。

—— 今後、継続的に取り組んでいく課題は？

**国吉** 我々の持つリソースを生かした普及活動と資金確保の両立です。

本年度はU19世界選手権、大学世界選手権が開催され、それぞれに日本代表を派遣しました。また、USA連盟が1月にテキサスで開催しているインターナショナルボウルへの高校生選抜チームの派遣も2回目となり、3回目となる来年1月には、米国U17ナショナルチームとの対戦が予定されています。

シニア日本代表も含めると現在4つの年齢カテゴリで日本代表活動が行われていますが、最も大きな課題はそれぞれが世界選手権開催年単年の活動になってしまっていることです。日本

代表の強化を図るためには、各世代の活動に一貫性を持たせることが必要です。これを実現するには、複数年継続的に日本代表を指導する専任コーチが必要でしょう。

また、日本全国の現状を把握するために、各地区連盟に足を運び、連盟関係者や、競技に協力をいただいている市町村区の首長へのご挨拶をさせていただきましたが、各地区連盟の方々の努力を目の当たりにし、JAF Aとして各地区連盟の普及活動に何らかの具体的支援を実現しなければならないという思いを強くしました。

日本代表の強化、各地区連盟へのサポート、いずれも資金が必要で、その資金をいかに確保していくかが、我々JAF A幹部に課せられた当面の課題です。

—— 具体的なアイデアは？

**国吉** まずは我々の競技にどんな価値があるのかを見極めることが必要でしょう。

今年1月のライスボウルでは、キックオフ時間を他のスポーツイベントとの競合を避けるために午後3時にしたこともあり過去最高の3万5千2人の観客動員を記録し、テレビ視聴率も前年から倍増しました。また、6月28日のパールボウルでは、Xリーグがリサーチ会社の『ニールセンスポーツ』と提携し、観客を対象にリサーチ会社による調査を行いました。パールボウルは19～23歳の大学生世代、プレー経験のない人たちが70パーセントと大半を占めることがわかりました。この結果は予想外の結果であり、調査をしてみて明らかになったことです。

我々にとってのリソースは、試合であり、所属チームであり、選手です。この資源を一般社会といかに連携させ、互いにメリットのある関係を築いていくことで資金を生み出し、所属団体、ひいては選手たちに還元できる仕組み作りに取り組んでいきたいと考えています。



2月14日、中四国を訪れた際に中四国学生連盟幹部と共に湯崎英彦・広島県知事を表敬訪問した時の一コマ。湯崎知事は東京大学時代、学内クラブチーム『バイキングス』でプレーしたフットボール・パーソンだ